

本は心の栄養

岩 間 秀 幸（教授 現代教職論）

二浪した末に大学に入った私を待っていたのは、希望などと言える生易しい代物ではなく、自分の生き方に対する根本的な疑問や反省、悩みといったものであった。これから何をテーマにしてどう生きていったらよいのか、という理想的かつ現実的な問題が私の行く手をふさいでいた。

そんな時、それまでも私を支え続けてきてくれた親友のA君が、一冊の本を紹介してくれたのである。私はすぐに大学の図書館に行ってその本を借りた。そして夢中で読んだのであった。その本の名は、勝海舟『氷川清話』で、晩年を迎えた海舟が心のおもむくままに様々な事柄を題材として自分の感想や意見やら考えを述べたものである。

私はこの本をこう解釈した。自分はする・やる人間で、周りの人はそれを批判する人だ、というのが海舟の現代我々への基本的なメッセージではないかと。海舟といえはまず西郷隆盛との江戸城無血開城が思い出される（この時西郷は同志の大久保利通に書簡で勝のことを「ひどくほれ申し候」とまで書いている。）が、すでに、山岡鉄舟を先に西郷の元へ派遣しており、話はついていていたものと思われる。本来この役は坂本龍馬に託されるべきものであったが、このときには龍馬は既に暗殺されてこの世にいなかった。鉄舟は、見事に代役を務めたのである。ついでに言うと龍馬は海舟の弟子であり、自分から弟子入りを志願しに行ったが、評判（海舟はこの時幕臣であったが、立場の相違する人たちからも一目置かれていた。）と違う人物であった場合、海舟を斬り殺す覚悟であったという。海舟をこのような人物たらしめたのは、剣道による精神的鍛錬、オランダ語の学習とそれによる近代的砲術の習得やアメリカへの渡航などであったことは十分考えられることであるが、江戸の町人への愛情や日本という国が植民地化されないようにするという高い志であったと私は思う。

私は海舟ほど「すべては人のために、自分のためにはなにも」（教育の神様といわれたペスタロッチの墓碑銘）という言葉にふさわしい人はいないように思われる。江戸城開城を経て明治維新になっても海舟の仕事は終わらなかった。一つは静岡の地に集められた旧徳川の幕臣たちの自立への援助であり、次には年長者として新政府への様々な注文・ご意見番としての役目であり、さらには、最後まで気になっていた徳川慶喜と明治天皇との仲介であった。（ちなみに、西南の役の西郷さんの名誉回復をし、上野に銅像まで建てたのも海舟である。）

明治天皇と慶喜との仲直りが終わると、海舟は自分の仕事は全て終わったかのようになっっている。最期の言葉は、「これでおしまい」。うれしい事に海舟の銅像は今、海舟が生まれ育った地、墨田区役所に立っている。私が16歳まで過ごしたところである。

親友とは実にありがたいものである。その後の私は海舟に関する書籍を買い集め、いつかは本格的に研究しようと思ってきたが、今はまだ実現はしていない。だが、私と『氷川清話』との出会いは、私にとって決定的なものとなった。海舟は私の師となったのである。何をテーマとしどう生きていくかの師となったのである。私の心の中にあった氷河のように固い氷が少しずつ溶け始めたのである。

我々の身体は、食べ物をとらなければ死んでしまう。しかし同じように心にも栄養が必要だ。我々は本を読むことによって心の栄養を取り、心を生かしていくことができるのである。それはテレビなどでは到底できることではなく、本が持っている**徳性**である。そのためにこそ図書館は存在するのである。

本を読むということは、本と対話することである。本と対話するということはその本が提示しているテーマを考えることである。そしてその結果、自分の思想を持つことである。

また本を読むということは、自分を知ることでもある。本を読めば着想が湧く。それについて考え書くことによって、自分が見えてくるのである。顔は鏡を見ればわかる。しかし心と自分の思想は書くことによってのみその姿を現す。その全てのもとにあるものが本である。

「学問」という言葉がある。よく大学は学問するところであるという。これは中国の古典『中庸』から来ているのであるが、正しくは「学」「問」「思」「弁」「行」という。過去現在のものを本で読んで学び、そしてそれに対して、未来に向かって問をもち、考える、分析する（対話する）そしてそれを実際に行い実現していくこと、これが学問である。勝はその意味で学問を身をもって生きた人である。その生き方は勝の最晩年の次の書簡の言葉にもっともよく表れていると思う。

「^{こうぞう}行蔵は我に存す、^{きよ}毀誉は他人の主張我にあずからず」

（私は、人のために、自分が正しいと思ったことをするだけだ。その責任も自分にある。それをほめるのもけなすのも、それは他人の勝手だ。言わせておけばよい。私には関係のないことだ。 岩間訳）

私は最近、板倉聖宣著『勝海舟と明治維新』（仮説社、2006年）を読んだ。やさしくわかりやすく書かれた本である。興味のある人にはお勧めする。図書館になれば、頼んで入れてもらおう。